

## 市指定文化財

へいじょうきょう さきょうろくじょういちぼうじゅうろくつぼしゅつどじんぐうかいほうちゅうせんいぶつ  
**平城京左京六条一坊十六坪出土神功開宝鑄錢遺物**

柏木町出土

皇朝十二銭の一つである神功開宝は、和同開珎の十倍の価値をもたせて発行された萬年通宝に代わる新銭で、天平神護元（765）年が初鑄です。

神功開宝鑄錢遺物は、平城京左京六条一坊十六坪の南東部で発掘された奈良時代末の井戸跡（S E 14）から一括して出土しました。鑄錢過程に関する遺物がほぼ揃っており、古代銭貨の鑄錢工程を復原できる良好な資料群です。

古代の鑄錢遺物は、奈良県飛鳥池遺跡で富本銭、山口県長門鑄錢所跡・大阪府細工谷遺跡・奈良県平城宮跡・平城京跡（左京三条四坊七坪・同十二坪・東市東堀河）から和同開珎のそれが出土しているだけです。神功開宝の鑄錢遺物としては国内唯一の出土例で、古代の貨幣鑄造技術史を考える

上で極めて重要な価値を有していることから平成25年3月に奈良市指定文化財となりました。

## 【神功開宝鑄錢遺物の内容】

指定品目には、<sup>せんぱん</sup>銭范7箇・<sup>いはな</sup>鑄放し銭3枚・<sup>いそん</sup>鑄損じ銭6枚・<sup>いざお</sup>鑄棹2箇・<sup>るつぼ</sup>坩堝4箇・<sup>ふいごはぐち</sup>鞆羽口4箇・<sup>ろへき</sup>炉壁7箇・<sup>どうさいふちやく</sup>銅滓附着瓦5箇・<sup>どうさい</sup>銅滓9箇があります。銭范（鑄型）は、厚さ1cm程の粘土板の上に0.4cm前後の真土を重ねた焼型です。銭を取り出す際に割られています。銭文や外縁の一部が黒く残る資料には、<sup>まね</sup>鑄型の表面に<sup>やきがた</sup>油煙（黒味）を離型剤として<sup>ゆえん</sup>附着させていた可能性が考えられます。

鑄放し銭は、<sup>はんきず</sup>范傷などが原因でそのまま放置され<sup>い</sup>鑄バリが残る銭です。銭文には、開字を隸書体とする資料としない資料（不隸開）があります。



市指定文化財 平城京左京六条一坊十六坪出土神功開宝鑄錢遺物

鑄損じ銭は、湯回りが悪く不整形な形状のまま溶銅が銭範内で凝固した資料です。

鑄棹は湯道を中心に溶銅が凝固した資料で、湯道の形状は幅 5.87 ～ 6.15 mm、深さ 3.5 mm 前後、断面カマボコ形に復元できます。左右段違いに堰の切断痕跡が残る資料と湯回り不良で一部に真土が付着する資料があります。

他に、鑄銭時にこぼれ落ちたり、飛び散ったりした溶銅がそのまま凝固した溶結銅や湯玉も出土しています。通常、鑄放し銭・鑄損じ銭・鑄棹・溶結銅・湯玉は、再溶解のために回収されます。

坩堝は、地金を溶解し、その溶銅を銭範に流し込むための容器です。口径 12.5 ～ 14.0 cm ・器高 7.3 ～ 8.3 cm の丸底椀形で、内外面ともに熱を受け、口縁部を中心に銅滓・湯玉が付着しています。

鞆羽口は、炉内に空気を供給する装置（鞆）の送風管の先端に付く筒型の土製品です。大きさは全長 17 cm 前後、先端部径 5 cm 前後 ・元口径 6 cm 前後 ・内孔径 2.0 ～ 2.5 cm です。先端部は被熱して泡立ち、銅滓・湯玉が付着しています。

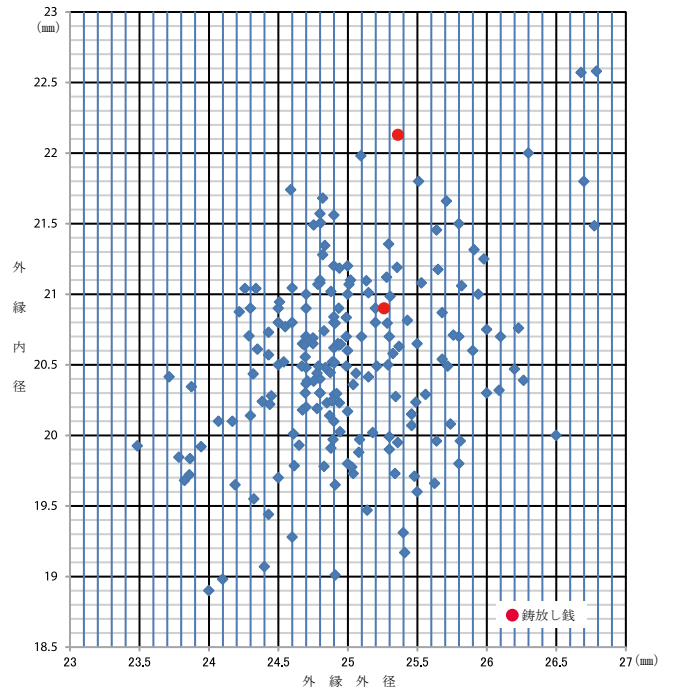
炉壁は、地金を溶解するために高温状態をつくり出す施設（炉）の壁の破片です。胎土にスサを含み、壁の厚さは最大 4.4 cm まで確認できますが、外表面が剥落するため正確な厚みは不明です。

銅滓付着瓦は、地金の溶解時に塵除け・風除けなどの目的で坩堝の上に置いたと考えられる丸瓦です。内外面が焼け、銅滓・湯玉が付着します。

銅滓は、地金の溶解時に生じた残存物が木炭・

溶結銅・湯玉とともに溶着したものです。

銭範は焼型で、富本銭や和同開珎の鑄銭技術を継承しています。鑄放し銭の外径は 25.3 mm 前後で神功開宝の平均外径 25.1 mm に近く、通用銭がつくられていたと考えられます。平城京左京三条四坊七坪では和同開珎の種銭（通用銭の鑄造に用いた一回り大きな銭）の生産工房が存在したと推定されていますが、それとは内容が異なっています。京内で通用銭がつくられたという記録もないため、私鑄銭（贗金）鑄造に関する遺物の可能性も捨てきれないところです。



平城京出土神功開宝の大きさ（奈良市保管分）



銭範(1～7)・鑄放し銭(8・12・16)・鑄損じ銭(9・11・14・15・17・18)・鑄棹(10・13)